

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463495

研究課題名(和文)「家族による家族学習会」に参加する兄弟や子供の体験と精神障害者家族会に与える影響

研究課題名(英文) The experiences of the brothers and sisters participating in the family peer-education program and the influence of their experiences upon the family groups

研究代表者

横山 恵子 (Yokoyama, Keiko)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：80320670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「家族による家族学習会」に参加するきょうだいや子どもの体験と精神障害者家族会に与える影響を検討した。きょうだいや子どもは親とは異なる経験や困難のあること、体験を共有できる同じ立場の家族同士の繋がりを求めている。そこで、未だ開催されていなかった、子どもの立場の家族学習会を開催した。その結果、地域に精神障害者の親を持つ子どものグループが立ち上がった。子どものグループは全国組織の精神障害者家族会の中に位置づけることを検討中である。今後は、多様な立場の家族学習会を開催する事で、若い世代の家族が家族会に入会することを可能にし、家族会の活性化に繋がると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the influence of “family peer-education program (in which the brothers and sisters and the children participated) upon the family association.

Some of the brothers and sisters of the parents with mental disorders and their children has different experiences and difficulties, and they seek to have some kind of connection with the family-group members with same background and to share the same experiences. So, they held their own education session which had never been held. As a result, a certain group of children (whose parents have some kind of mental disorders in their region) came into action. The group is considering how their group should be given a suitable position among the nation-wide family groups.

From now on, many different types of meetings will be held and, through these meetings, the entrance of the younger generation into the family groups will be made possible and the family groups themselves will be led into activation.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神障害 家族 家族会 家族学習会

1. 研究開始当初の背景

日本では、2007年度から、地域精神保健福祉機構（コンボ）が、統合失調症の「家族による家族学習会」と呼ばれる、家族教育プログラムの普及事業を開始した。これは、精神障害者家族会（以下、家族会）の会員3~6人が担当者となり、保健所や医療機関などからの紹介を受けて、家族会につながっていない家族10人程度を集め、1回3時間、5回を1コースとして行うピア教育プログラムである。このプログラムは全国に広がり、2012年度までに100カ所以上で実施している。専門家の行う「心理教育」との違いは、目標を患者の再発予防ではなく、家族のエンパワメントに置いていることで、参加家族は仲間との共感の中で、実践的な知識を得ることができる（地域精神保健福祉機構，2010）。

家族会は専門家にはできない家族支援を提供しているセルフヘルプグループである。しかし、これまで地域の資源の不足から、本来の家族支援よりも、作業所設立など社会的活動に重きを置く傾向にあり、家族会の7割が事業活動の負担増、会員意識の乖離などの課題を抱えて高齢化し、新たな家族を受け入れる力の乏しい現状にある（全家連保健福祉研究所，1998）。また、1994年の地域保健法への改正で、保健所から市町村に精神保健福祉サービスが移行し、家族会支援が希薄となった。2006年には全国で1600あった精神障害者家族会が、2013年には約1000カ所に減少しており、家族会は非常に危機的な状況にある。

家族会の会員構成の中心は親であるが、「家族学習会」には、これまで家族会につながりにくかった、きょうだいや子どもなど、多様な立場の家族が参加するようになっている。最近、家族支援の対象として、きょうだいや子どもへの支援の必要性（土田，2013）が言われるようになっており、「家族学習会」は多様な立場の家族への支援の可能性も秘めていると考える。

これまでの親中心の家族会活動に、きょうだいや子どもなど、立場の違う家族が入会し、会員構成の多様性が生じていた。これは、家族会にとって大きな変化であり、今後の家族会のあらたな活動の可能性を秘めていると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「家族学習会」に参加する、きょうだいや子どもの立場にある家族にとっての「家族学習会」での体験を明らかにすることである。また「家族学習会」を体験した、きょうだいや子どもの立場にある家族が、地域の精神障害者家族会に入会することでの家族会に与える影響を明らかにし、日本の高齢化した家族会の活性化や新たな活動への可能性を検討することである。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン：質的帰納的研究

(2) データ収集期間

2015年5月～2018年3月

(3) 研究協力者

2014年度きょうだいの立場の家族学習会担当者3名

未受診の親を持つ成人した子どもの立場の家族3名

2016年度の子どもの立場の家族学習会担当者6名及び参加者5名

2017年度の子どもの立場の家族学習会担当者7名及び参加者9名

(4) データ収集方法

に関しては、半構造的なグループインタビューを行った。インタビュー内容は了解を得て録音し、逐語録を作成。逐語録を繰り返し読み、内容を抽出しコード化し、意味内容の類似性と相違性に従ってカテゴリ化した。

に関しては、学習会の前後で、担当者、参加者別のグループインタビューを行い、同様に分析し、カテゴリ化した。さらに、学習会の前後で質問紙調査を実施し、数値部分は量的に分析、記述部分は質的に分析した。

(5) 倫理的配慮

研究協力者には研究の主旨と方法を文書と口頭で説明し、同意書にて承諾を得た。研究協力の辞退によって不利益になることはないこと、個人が特定されないこと、プライバシーの保護には十分配慮すること、得られたデータは研究目的以外には使用しないことを説明した。埼玉県立大学倫理委員会の審査を受け、承認を得た（第26075号）。

4. 研究成果

(1) きょうだいと子どもの立場の家族の経験

家族学習会を経験したきょうだいの立場の家族、未受診の親を持つ成人した子どもの立場の家族へのインタビューを実施し、立場の違いを比較した。きょうだいや子どもは親とは異なる経験や困難のあること、それぞれが体験を共有できる同じ立場の家族同士の繋がりを求めていることが明らかになった。

子どもの立場の家族の体験を分析した。対象者は40代後半の既婚女性3名で、全員が未治療の統合失調症の母親を持っていた。

分析した結果、**介護者として生きる子ども 乏しい支援 子どもへの心身への影響 子ども同士の繋がりを求める** という4つのコアカテゴリが抽出された

子どもは、幼少期に「優しい母親」が「怖い母親」に変貌し、【発病により変貌する母親】を経験していた。成長に伴い、友達や近所付き合いを避けさせるなど、【自由な行動を制限する母親】に理不尽さを感じていた。さらに、離婚で【母子家庭となって孤立】し、【貧困が出現】していた。大人になって精神病と自覚してからは、【病気ならば治したい】

という気持ちに変化したが、受診はできなかった。【母親のコントロールから離脱】できた契機は、独り暮らしや結婚であった。母親との関わりを避ける一方で、常に親を見守り、経済的支援を続けていた。それは、幼少期からケアラーとして生きる子どもの姿であった。

子どもは、この状況を【誰かに気づいてほしい】と願うが、自らは相談できず、支援は得られなかった。子どもの心身への影響は様々であった。自律神経失調症などを小児期に経験し、思春期から青年期にかけては、2人がうつ状態を経験していた。現在も、【自分に自信がない】など、【対人関係が苦手】であった。同じ立場の子ども同士の繋がりを求め、【自分の体験を活かしたい】と考えていた。

(2) 子どもの立場の家族学習会の開催

精神障害の親を持つ子どもたちは、同じ立場の子ども同士の繋がりを求めていた。そこで、未だ開催されていない、子どもの立場の家族学習会を開催することとした。

<2015年度>

2015年5月に「子どもの家族学習会セミナー」を開催、参加者の中から協力者を募り、11月～2月まで、「子どもの立場の家族学習会(5回連続講座)」を開催した。家族学習会では、子ども版のオリジナルテキストを使用した。親やきょうだいの使用する統合失調症の家族心理教育用テキストは、体験の違いから子どもには合わないためである。テキストは、子どもの成長のライフサイクルに沿った内容とし、子どもの体験から得られた困難を加えて、話し合いの糸口になるように工夫した。成人期以降には、結婚、子育て、介護についても加えた。担当者には担当者研修会に参加してもらい、グループ運営のトレーニングを受けてもらった。家族学習会は1グループとし、担当者は6名、参加者5名で実施した。

<2016年度>

2016年度も同様に、5月に「子どもの家族学習会セミナー」開催、参加者を募り、9月～12月まで「子どもの立場の家族学習会」を開催した。担当者は、2015年度の家族学習会の参加者から募り、担当者には担当者研修会に参加してもらった。家族学習会は、2グループとし、家族学習会担当者7名、参加者9名で実施した。

家族学習会の参加者は、仲間の共感の中で、自らを振り返り、自信を回復するとともに、病気の親との関係にも新たな発見や変化を見出していた。この変化は、担当者も同様であり、他者を支援することで、自己肯定観が生まれ、セミナー等で自分の体験を語ることや、家族学習会の担当者を希望するなど、自分の体験を積極的に生かしたいと考えているようになっていた。実施前後のインタビュー、質問紙調査のデータは継続して分析している。

この成果は、2015・2016年度の「リカバリーフォーラム」の分科会(子ども支援)で報告した。また、これらの活動は、朝日新聞、毎日新聞の記事となった。

(3) 子どものグループ設立と可能性

家族学習会を通して出会った担当者と参加者が精神障害の親を持つ子どものグループを設立し、孤立した仲間への支援を目的にホームページを開設した。

また、2016年9月から都内で活動している「精神障害のパートナーを持つ配偶者の会」と連携し、2017年1月、3月の定例会では、配偶者に同伴する未成年の小中高生に対して、成人した子どもが交流の場を持ち、子ども支援を行っている。

子どものグループは、現在、全国組織の精神障害者家族会の中に位置づけることを検討中である。

きょうだいや子どもの立場の家族は地域で支援を受けることなく孤立している。しかし、地域の家族会の構成員は親が中心であることから、体験の違う、きょうだいや子どもの立場の家族は繋がりにくい。今後、親だけでなく、多様な立場の家族学習会を個別に開催する事で、家族会に様々な立場の家族が集える場ができることを可能にし、若い世代の家族の入会に繋がるのではないかと考える。今後は、家族会の様々な立場の家族学習会開催に向けて、専門家は側面的な支援をしていくことが必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5件)

蔭山正子、小林清香、横山恵子、中村由嘉子：精神科病院での「家族による家族学習会」実施がもたらした家族と精神保健福祉士のパートナーシップ インタビュー内容の質的記述的分析、精リハ誌(精神障害者とりハビリテーション)、査読有、20(2)、177-183、2016.

蔭山正子、小林清香、横山恵子、中村由嘉子：家族ピア教育プログラムの精神科病院での採用と継続に関する要因の検討：ケーススタディ、査読有、63(10)、627-636、日本公衛誌、2016.

横山恵子：子どもの立場の方への支援、メンタルヘルスマガジン こころの元気+、10(1)、16-17、2016.

横山恵子：どのような支援があるのか現状と課題、メンタルヘルスマガジン こころの元気+、10(7)、14-15、2016.

横山恵子、林裕栄、松本佳子：地域生活支援センターにおける精神障がい者への支援の実態と課題、第47回日本看護学会論文集(精神看護)、査読有、19-22、2017.

〔学会発表〕(計 3件)

横山恵子、蔭山正子：統合失調症患者の家族体験がきょうだいに与えた影響 - 生き方への変化と社会に望むこと -、日

本精神保健看護学会、第 25 回学術集会抄録集, 138, 筑波, 2015.6.28.

横山恵子、蔭山正子：未治療の母親を持つ子どもの体験 - 40 代女性 3 人へのインタビューから - , 日本精神保健看護学会, 第 26 回学術集会抄録集, 156、滋賀, 2016.7.2.

横山恵子・林裕栄・松本佳子：地域包括支援センターにおける精神障害者への支援の実態と課題, 第 47 回日本看護学会(精神看護)学術集会抄録集, 146, 青森, 2016.9.16.

〔図書〕(計 1 件)

蔭山正子、横山恵子、中村由嘉子、小林清香、佐久間陽子：精神障害者の家族への暴力という SOS 家族支援のためのガイドブック, 明石書房, 2016.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

紹介記事:(計 3 件)

親の精神障害 相談できぬ孤独(2015 年 7 月 29 日朝日新聞 朝刊)

親の精神疾患を打ち明け前へ(2016 年 6 月 29 日毎日新聞 朝刊)

当事者の語り支え 精神疾患の親がいて(中)(2017 年 1 月 9 日朝日新聞 朝刊)

ホームページ等：なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 恵子 (YOKOYAMA, Keiko)
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授
研究者番号：8 0 3 2 0 6 7 0

(2) 研究協力者

蔭山 正子 (KAGEYAMA, Masako)
大阪大学大学院医学系研究科・准教授
研究者番号：8 0 6 4 6 4 6 4